

コミュニティ・スクール運営の課題に関する研究

—— 地域コーディネーターの視点から ——

真 田 穰 人¹⁾
當 房 詠 子²⁾
南 雅 則³⁾
佐々木 聡⁴⁾

キーワード：コミュニティ・スクール 地域コーディネーター 学校運営 地域連携

問題と目的

昨今、子どもたちを取り巻く環境や学校現場での問題が複雑化し、多様化する中にあるのは、これまで以上に学校・家庭・地域の連携・協働が必要とされている。学校での教育力の向上を目指すとともに、子どもが安心して暮らせる環境をつくりつつ、地域の活性化を図ることを目的に、文部科学省が中心となって、学校・家庭・地域をつなぐ取組を支援する事業として「コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）」の導入が進められている。2004年の法制化後、2017年の法改正を経て、その設置は教育委員会の努力義務とされた。コミュニティ・スクールとは、学校と地域住民等が力を合わせて学校の運営に取り組むことを可能とする仕組みであり、外部人材の活用によっては学校行事や学習を豊かなものにし、地域と一体となって特色ある学校づくりを進めていくことができる（文部科学省、2022）。文部科学省（2022）によると、その設置数は着実に増加してきており、2021年5月時点で全国の公立学校の33.3%（11,856校）がコミュニティ・スクールを導入しているが、導入状況については自治体間・学校種間に差が見られる。

コミュニティ・スクールの成果や課題については、導入された学校を対象とした全国調査が文部科学省により行われており、それをもとにした様々な研究報告がある。長畑（2015）は、学校運営への地域住民・保護者の参画が進むことで地域に開かれた学校運営が実現されつつあるこ

1) 梅光学院大学 子ども学部
2) 梅光学院大学 文学部
3) びわこ学院大学 教育福祉学部
4) 高野山大学 文学部

と、地域教育力の強化と地域全体の活性化に貢献する「地域と共にある学校づくり」が進んでいることなどを成果に上げつつも、教職員の関心の低さや保護者・地域住民の理解不足が依然課題としてあること、学校運営協議会委員や学校支援ボランティア等の人材確保の難しさ、関わる人々の負担感が大きいこと、活動資金が十分でないことを指摘しており、コミュニティ・スクールの質的向上のためには、地域コーディネーターの育成、配置が欠かせない要件であるとしている。長友・静屋・池田・前原（2017）では、学校支援や地域貢献への取り組みは進みつつあるとしながらも、「学校を支援する仕組」として捉えるのではなく、地域の子どもたちを学校と一体となって育てていくという本来の目的を十分に認識する必要性を指摘している。ただし、その教育資源としての地域人材をボランティアに頼る形で運用することは恒常的・継続的ではないと下條（2020）は指摘しており、専門知識を持った人材の確保のための予算整備の必要も述べている。コミュニティ・スクール導入当初からの課題の多くは、2008年に3年を目途に国庫負担の委託事業として整備された「学校支援地域本部事業」からの課題として八尾阪（2012）が指摘した「学校と地域が連携する仕組みの構築」、「事業のキーパーソンであるコーディネーターの活動促進のための支援の姿勢」、「ボランティアとの継続的な協力関係」、「資金面での継続性」等、ほぼ変わらずに続いていることがうかがえる。しかし、その報告のほとんどは、統計的な手法を用いない量的データの分析か、教育現場の実践報告に留まり、コミュニティ・スクールの運営の課題について質的に詳細に分析した研究は希少である。

そこで本研究では、連想刺激に基づいての自由連想や多変量解析を援用して、操作的・客観的に個人別にイメージ構造を分析することができるPAC分析（内藤, 2002）を用いて、地域コーディネーターの経験者を対象に、コミュニティ・スクールの運営に関する課題について明らかにすることを目的とする。たとえ1事例であっても、コミュニティ・スクール運営の中心的な立場にある地域コーディネーターの視点から、コミュニティ・スクール運営の課題の構造分析ができる可能性があり、これまでの研究で明らかにされた知見と比較し検討できると考えられるからである。

方法

調査協力者：調査協力者は、研究の趣旨および参加に同意したA市立B小学校で導入されたコミュニティ・スクールの地域コーディネーター経験者で、40代後半の女性である。4年制大学を卒業後、語学教師となり、11年間勤務。その後、母校の大学教員の紹介で、地域コーディネーターを9年間務める。勤務条件は、委嘱期間は1年単位で、勤務時間は月に10時間程度であった。
手続き：面接は第1著者が担当した。連想刺激としては、以下のような刺激文を提示するとともに、口頭で読み上げた。

「あなたは、コミュニティ・スクールの地域コーディネーターとして仕事をしていて、コミュニ

ティ・スクール運営の課題と感じたのは、どのような点やどのような状況でしょうか。また、そのような点や状況では、どのようなことを心がけたり工夫したりしていましたか。頭に浮かんだ文章やイメージや言葉を思い浮かんだ順に番号をつけてカードに記入してください。」

ついで、内藤（2002）を参考に、用意したカード（縦 3cm、横 9cm）に想起させた順に連想内容を記入させた。その後、重要だと感じられた順に番号を記入させた。次に項目間の類似度距離行列を作成するために、1：「非常に近い」～7：「非常に遠い」の7段階尺度で評定させた。そして、作成された類似度距離行列に基づき、ウォード法でクラスター分析を行った。第2回の面接では、以下の手順で、デンドログラムの結果について調査協力者のイメージを聴取した。

まず、調査協力者がまとまりをもつクラスターとして解釈できそうな群ごとに各項目を読み上げ、項目群全体に共通するイメージやそれぞれの項目が併合された理由として感じられるものについて質問した。その後、群間比較させてイメージや解釈の異同を聴いた。さらに、デンドログラム全体のイメージや解釈について報告させた。これらの作業に続いて、各連想項目単独でのイメージがプラス、マイナス、どちらともいえない（0）のいずれに該当するのかを回答させた。最後に検査者として解釈しにくい個々の項目を取り上げて、そのイメージを補足的に質問した。

A市立B小学校の地域コーディネーターの活動

A市教育委員会の「コミュニティ・スクールに係るコーディネーター配置要綱」には、コーディネーターの活動として、学校運営協議会の運営補助、学校と学校を支援する団体、外部指導者等との連絡調整、コミュニティ・スクールの推進に係る取組の企画及び運営補助や事務処理等が示され、その活動の報告に対し年間120,000円を上限とした報償費を支給することが示されている。また、A市教育委員会では、年8回のコーディネーター養成講座を継続的に実施しており、県の教育委員会でもステップアップのための講座を年4回実施している。

以下に、主な活動と関係者との関係（Figure 1）、年間活動表（Table 1）を示す。

- (1) ボランティアの募集・広報活動（活動通信の発行、掲示物作成）
- (2) ボランティア登録者名簿の作成・管理
- (3) 教員との連携とボランティアの調整

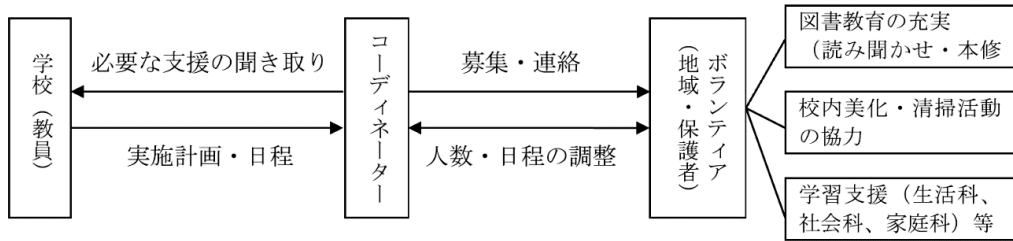


Figure 1 コミュニティ・スクール関係者の関係図

Table 1 コミュニティ・スクールおよび地域コーディネーターの年間活動表

時期	活動内容	年間を通じた活動
4月	・芋の畑作り打ち合わせ	【毎日】 ・登下校時の交通安全指導 【週に1回～数回】 ・本修理 【月に1回～数回】 ・朝学時の読み聞かせ ・支援学級での読み聞かせ ・古紙回収整理 ・授業参観時の未就学児見守り 【不定期】 ・図書室利用や学習の補助 ・図書室整備(掲示, 清掃) ・樹木の剪定, 草刈り ・草刈り機の修理
5月	・地元伝統踊り指導(運動会全体練習) ・町たんけん予行練習時の安全見守り(2年生) ・図書室本の受け入れ(破れ防止)作業	
6月	・芋畑の畝作り・苗植え指導(2年生) ・町たんけん時の安全見守り(2年生) ・水泳授業の安全見守り ・清掃活動(全学年) ・家庭科ミシン補助(5年生)	
7月	・水泳授業の安全見守り ・夏休み補習授業での丸付け ・吹奏楽クラブの指導	
8月	・清掃活動(全学年・親子)	
9月	・校外学習引率(6年生)	
10月	・異文化交流体験(5年生) ・清掃活動(全学年)	
11月	・芋の収穫指導(1・2年生)	
2月	・清掃活動(全学年) ・給食試食会(全学年)	

結果

重要順位, クラスター分析及び単独イメージの結果は, Figure 2 の通りであった。重要順位を1/3まで取り上げると, ①地域コーディネーター選出の基準と役割の不明瞭さ, ②ボランティアの意識と学校教員の意識のずれ, ③地域コーディネーターと学校教員との連絡の難しさ, ④保護者ボランティアと学校教員とのつながり方で, コミュニティ・スクールを構成する学校教員, 保護者ボランティア, 地域ボランティア, 地域コーディネーター間の意識がずれており, 連携する

ことに難しさを感じている。構造全体の単独イメージでは、+が3項目、-が7項目、0が3項目で、かなりマイナスのイメージが強い。

[調査協力者によるクラスターの解釈：抜粋]

クラスター1は、「地域コーディネーター選出の基準と役割の不明瞭（不明瞭）さ」～「連絡方法の簡略化」の5項目：地域で知っている方があまりいない中で、コーディネーターの役割が果たせるのかという不安があって始めたんですけど。なので、地域の方とつながりが少ない中で動くことの難しさが共通項ですね。私は地域の間人ではないので、広報の難しさがありました。

コーディネーターに求められている役割って地域の方を学校に入れる役割と、学校の先生方のニーズを聞くというのが大事なところなんですけど、学校にいる時間が長くない、ある程度限られた時間で、そして先生方もお忙しいなかで、空いてる時間をみつけてニーズを聞き出す、お時間をいただくのも申し訳ないなあと思いつつ、時間をやりくりするのが難しかったです。

クラスター2は、「ボランティアの意識と教員の意識のずれ」～「ボランティアの悩みを聞くこと」の2項目：コーディネーターって、教員と地域の方と保護者のボランティアっていう、

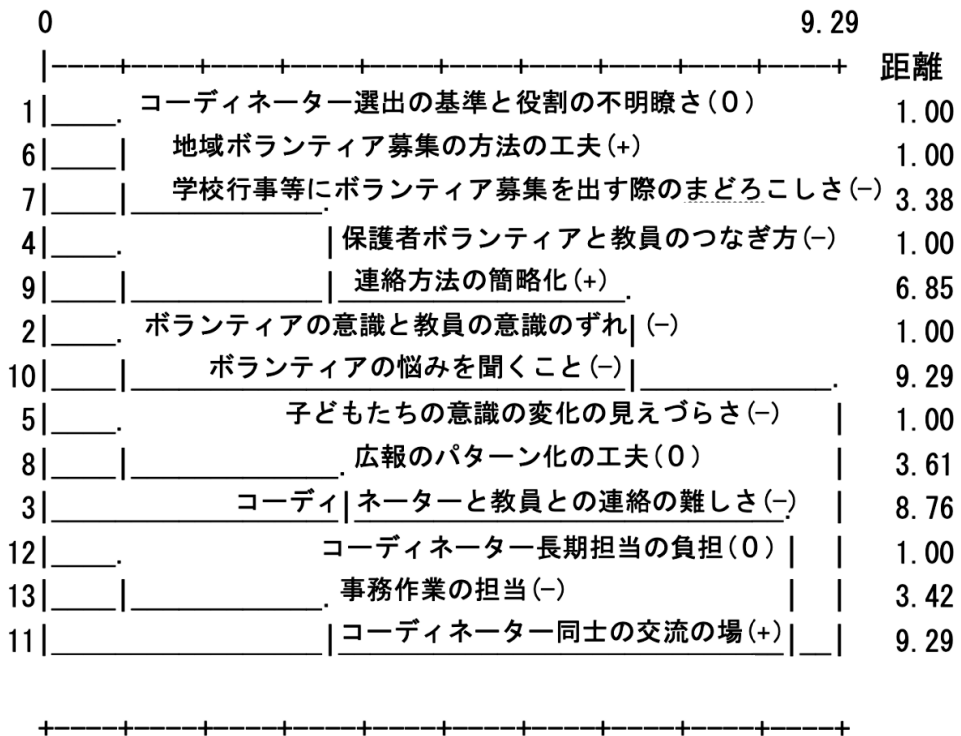


Figure 2 調査協力者のデンドログラム

- 1) 左の数値は重要順位
- 2) 各項目の後ろの () 内の符号は単独でのイメージ

三角形の中に入っているイメージで、それぞれの方の事情が見えてくるんですが、何か噛み合わない部分というの私だけ見えていて、その何か板挟みとかその苦しさというのがありますかね。保護者の方って、学校や子どもに対してすごく思いが強く、先生方に対する要望もいろいろあったりして。でも、直接は言いにくいから、コーディネーターが間に入っているからこそ言いやすい要望だとか、いろいろ言ってこられる。それを全部が全部、先生にはもっていけないわけですよ。保護者には理解を示し、先生方には、こういう要望もあるんですけど、どうですかね、難しいですよねとか言いながら、板挟みにあうというより間に入ってうまくとりもつという感じがどんどん積もっていきました。うまくとりもつ難しさ、うまくとりもたないといけないんですけど、全部の要望を聞けるわけではないので、そこにもどかしさがあるという。

この地域での私の関係性の薄さがいろいろ…でも、それが逆に保護者とか地域の方からしたら、元々の地域の人間でない分、多分気軽に話せるんだろなあとは思いますが。でも、そういう部分は教育委員会のコーディネーターの業務には入らない。でも結構その時間があるので。愚痴をきいてもそれを解決できなかつたり、先生にもっていけなかつたりするので、自分のストレスになったり、その部分でストレスになっているんですよということを共有する場がなくて。

クラスター3は、「子どもたちの意識の変化の見えづらさ」～「コーディネーターと教員との連絡の難しさ」の3項目：子どもたちが地域の方と関わることで、子どもたちの成長とか意識の変化が知れる機会がほしかったなあ。コーディネーターの仕事って、実際動く方、先生方とボランティアの方を橋渡しするっていうことに意識が向いてしまって、子どもたちがどう思うのかとか、子どもたちがどう成長していくのかとか、そういう視点がやっているとなくなりました。子どもの変化とか意識とかわかる機会があつたらなあと思いました。

2つめのまとめとも関係あるんですけど、保護者の方の要望と、先生方の要望とがそれぞれあるんですけど、もっと子どもの反応を明確に見える形にしていたら、もうちょっと要望のずれは変わっていたかなって。

クラスター4は、「コーディネーター長期担当の負担」～「コーディネーター同士の交流の場」の3項目：コーディネーターは学校に一人だけど、市内には何十人もいるというつながりがあつて、教育委員会がつないでくれる場を設けてくれるようになったんですね。そこで、コーディネーター同士の情報共有ができました。

でも、どの方みても長期で、みんな負担ですよって。長くすることは、学校の先生からするとお願いしやすい、いいことが多いと言われたんですけど。コーディネーターって続けないといけない大変さがあるなあって思いました。

他の学校のコーディネーターから、他の学校のことを知って愚痴もうまれますけど、そこで共有できることであつたり、比較することで自分のストレスが減るメリットはあつたので。学校では一人なんですけど、連絡をとろうと思えばとれるようになったので。うちの学校では難しい

けど、そちらはどうですかとか、アドバイスをもらえたりできるようになったのはよかったし、教育委員会も動いてくれたのだと思って感謝というか、そういうことが大事なのだと思った。

コーディネーター同士の横のつながりって、すごくありがたいんですよね。交流の場というか、情報共有できることのありがたさ、負担を減輕されることとか。それはとても大きなことだったなあと。それがあるから、続けられたのかもしれない。他の学校でやっていることとか、比較とか参考になることがあると、自分の改善点が見えてくるし、次の目標や、やりたいことが見えてくるし、励みになる。そういう横の、コーディネーター同士の横のつながりって大事ななあって思いますね。

クラスター 1 とクラスター 2 の比較

似ているのは、コーディネーターの立ち位置が学校、地域、保護者ボランティアの三角形の真ん中にある立ち位置。そこは1も2も同じかなあと。でも、1は距離がある、距離があるから広報も連絡も難しいところがあるんですけど、2は逆に、三角形だとしたら、そのなかのそれぞれの頂点の距離が近くなって、それぞれに近いからこそその負担もあるんですよね。2の方はコーディネーターと学校、地域、保護者ボランティアとのそれぞれの関係、つながりがあることによる信頼もあるけど、負担もあるという感じですかね。

クラスター 2 とクラスター 3 の比較

2はコーディネーターと教員、コーディネーターとボランティア、それぞれの対象とのつながったラインがある感じ。3は、その背後には子どもが見える感じ。コーディネーター、そして保護者ボランティアがいたら、保護者ボランティアとはつながっているけど、その保護者ボランティアが子どものことを考えている。私と直接子どもというのは薄いんでしょうけど。子どもを見ている保護者、子どもを見ている学校の先生、地域の方っていう感じですかねえ。3は子どもっていうキーワードでつながっている感じですかねえ。

クラスター 3 とクラスター 4 の比較

4は横でありフラットであり安心のようなつながりなんですけど。4は聞くと返ってくる、悩みとか私も、うちもみたいな。3はそれがない、子どもたちの反応、先生たちの反応が見えない、そんな感じ。

クラスター 1 とクラスター 3 の比較

子どもをあんまり見ていない感じ。コミュニティ・スクールの目標は、子どもに向いているはずなのに、そこにあんまり目が向いていないところ、それが出ているのが3。出ていないことに気づくのが3。一番初めにコーディネーターをやってくださいといわれたとき、地域の方を学校に入れてくださいというところだったので、それが先にあって、子どもがどうっていうのが後にあったんですけど、自分のなかには浮かんでなかったんですよね。コーディネーターとして、地域と先生とは一生懸命結ぼうとはするんですけど、その先の子どものいるっていうイメージは薄かっ

たなあという気づきですね。

本当は、教員とボランティアをつなぐことで、活動や行事で子どもたちの笑顔があったり、できるようになる、成長があったりとかは、結果その先にはあるんですけど、何かそこを目指して動けていなかったなあと思います。

クラスター 2 とクラスター 4 の比較

2の方は、一つ一つの立場の方とのつながりがあるんですけど、学校内地域内の中でのつながり。4は、学校地域外の感じ。学校から外にあるところの同じ立場のつながり、コーディネーター同士の横のつながりの安定感。横の安定。4の方はフラットな感じですかね。

クラスター 1 とクラスター 4 の比較

1は自分の学校地域内のつながり、4は市全体を意識したコーディネーター同士の横のつながりで見えてくる隣の芝生っていう、1は自分の学校内、地域内であったのが、4は市全体に広がり、コーディネーター同士の横のつながりを表している感じ。

全体について

コーディネーターの抱える悩み、課題、役割、コミュニティ・スクール継続の鍵、信頼関係の構築。コーディネーター負担の軽減、コーディネーターへのフォロー、やりがい、もっと向上させたいという思い。後継者の育成と引き継ぎ。集約すると、継続のための鍵。

補足質問

地域ボランティア募集の方法の工夫：5月に地域向けに固い文面で、ボランティア登録の募集の紙を出すんですよ。最初は丁寧に文章をつくらなきゃという感じだったけど、まどろっこしさがあるので、文章を簡略化して、ピンポイントでお願いしたり、固くないチラシをつくったりした。ラインでつながったりもして、つながる方法が変わったので、私もお願いしやすくなったという感じだった。

コーディネーター長期担当の負担：コーディネーターを長期間していると、地域との密着度が高くなって、地域の行事に顔を出さないといけなくなるんですよ。自分の地域でないのというミスマッチ感があります。あと、給料でなく、謝金という制度になっているのですが、例えば、月間で基本10時間最高でも20時間と上限が決まっているので。さらに年間でもいくらか金額が決まっているんです。また、実動時間は、学校の中で2倍、これには準備時間は含まれません。ボランティアの方の要望を聞いたり、悩みを聞いたりする時間はいれないので。学校での滞在時間は2時間と決めていても、それに準備する時間は他にとる必要があるし、学校の滞在時間も実際は3,4時間になっていました。

総合的解釈 はじめに、それぞれのクラスターの内容について吟味した後で、クラスター間の関係や全体的特徴について考察する。

クラスター 1：「コーディネーター選出の基準と役割の不明瞭さ」を感じるとともに、「保護者

ボランティアと教員のつなぎ方」を試行錯誤しながら考え実践するものの、なかなかうまくいかず、「学校行事等にボランティア募集を出す際のまどろこしさ」を感じるなかで、何とか「地域ボランティア募集の方法の工夫」を行い、「連絡方法の簡略化」という方法を見出し、関係をつくっていくようにする。これらは、〈地域コーディネーターを中心とした活動初期の関係づくりの困難さ〉を示しているといえよう。

クラスター2:「ボランティアの意識と教員の意識のずれ」「ボランティアの悩みを聞くこと」は、いずれも関係者の思いに関することに言及しており、マイナスのイメージである。コミュニティ・スクールの運営に欠かせないボランティアのときには強すぎる要望を懸命に聞き、ストレスを感じながらも、何とか教員や学校と調整しようとする。このクラスターは、〈関係者の意識共有の困難さ〉として命名することができよう。

クラスター3: コーディネーターの限られた活動時間のなかで、その成果を発信するために、「広報のパターン化の工夫」をするものの、その工夫が反対に「子どもたちの意識の変化の見えづらさ」につながってしまう、その背景には、コーディネーターとともに、多忙化している教員との調整、「コーディネーターと教員との連絡の難しさ」があると解釈できる。そこでこのクラスターは、〈意識化しづらい子どもを中心としたコミュニティ・スクール運営〉と命名することができよう。

クラスター4: 地域コーディネーターはその専門性から、交代することが難しく長期で担当する場合が多い。その結果として、「コーディネーター長期担当の負担」や「事務作業の担当」の負担がかかってしまいがちである。しかし、「コーディネーター同士の交流の場」があり、情報共有を行うことで、負担が軽減されたり、励みになったりする。このクラスターは、〈コーディネーターの安心感を生むピアの交流〉であるといえよう。

全体として: 地域コーディネーターの多岐にわたる役割、地域コーディネーター自身の活動時間の少なさ、多忙化する教員への遠慮、共有化しづらい保護者ボランティア、地域ボランティア、教員それぞれの思いが、円滑な運営を妨げていること。それに対し、地域コーディネーターが孤軍奮闘し、学校、地域、保護者ボランティアの三者の中心に位置する立場としてコミュニティ・スクールの関係者を調整し運営の一旦を担うものの、個別の工夫に留まることとなり、全体として、子どもたちの意識の変化や成長といった、コミュニティ・スクール運営のなかで一番大切な部分の一つがコミュニティ・スクールの組織全体で共有されず、置き去りになってしまうこと。しかし、注目されるのは、「コーディネーター同士の交流の場」という項目が全てのクラスターをつなぐ中心軸の位置にあることが暗示するように、同職のピアとの関わり合い、相互補完的なサポートがコミュニティ・スクールの運営の中心的な立場の一人である地域コーディネーターを支えていること。これらの解釈可能性について、総合的な構造として意識化され、明確化されていた。

考察

(1) コミュニティ・スクール運営の課題とその要因

地域コーディネーターの経験者を対象とした本研究は、地域に基盤がないために初期の関係づくりに苦心した事例であった。調査協力者は、地域や保護者との関係がないなか、地域コーディネーターに選出されたことや、そのような立場で地域コーディネーターを務めることに不安や懸念を抱えていたが、コミュニティ・スクール創成期ということもあったからか、十分に納得がいく説明やコーディネーターとしての教育や研修を受けられていない。八尾阪（2012）が指摘しているように、コミュニティ・スクール運営の中心的な役割を担う地域コーディネーターが活動を促進するために、その役割や活動の内容を理解したうえで実践に取り組むこと、そのために、教育委員会が積極的に教育や研修を行うことは、コミュニティ・スクールの円滑な運営には欠かせないと言えるだろう。地域コーディネーターの養成は、コミュニティ・スクール運営の大きな課題の一つと言える。

一方、調査協力者は、元々地域出身ではなく、地域との関係性が高くないからこそ、気軽に保護者や地域の人々と話ができる、話をしてもらえるとというコーディネーターとしてのメリットも語っている。坪松（2022）は、地域在住ではなかった「よそ者」だからこそ、地域住民や地域の魅力を認識し、地域住民自身が主体的に地域づくりに関わる場をつくることやつなぐことができる可能性を指摘している。地域との関係性の有無に関わるメリット、デメリットがその両方にあることを示すとともに、メリットの活かし方やデメリットへの対応策を明らかにしたうえで、地域コーディネーターの選出をしたり、養成をしたりすることで、地域コーディネーターが自身の役割や活動を認識し、自身をもって職務にあたることで、コミュニティ・スクールも円滑に運営されるといえる。

また、調査協力者は、ボランティア、特に保護者ボランティアと教員との調整に困難を感じていた。その背景としては、調査協力者が語るように、保護者の学校や子どもに対する強い思いとともに、教員の忙しさ、そして、地域コーディネーターの勤務時間の短さが挙げられよう。教員の忙しさを軽減する動きとして、働き方改革や学校業務改善が日本全国の学校で始まっているが、その取り組みが実を結ぶまでには、しばらくの時間が必要であると考えられる。学校教員だけでなく、調査協力者自身も地域コーディネーターとしての実働時間が、正規の勤務時間の2倍以上であったことを語っている。八尾阪（2012）や下條（2020）は、地域コーディネーター等の専門性の高い人材確保のための予算整備、資金面での支援を拡充し、地域コーディネーターの勤務時間の確保及び拡大を図ることが必要だと指摘している。このようなことも、円滑なコミュニティ・スクールの運営には欠かせないといえるのではないだろうか。さらに、教員の関心や保護者・地域住民の理解不足（長畑，2015）が、「ボランティアの意識と教員の意識のずれ」の項目

にもつながっていると考えられることから、その調整の全てを地域コーディネーターに委ねるのではなく、学校の教職員、地域・保護者ボランティア、そして地域コーディネーターが一堂に会して理解促進を行うような場づくりや意識の共有方法の構築が必要であるといえよう。

さらに、調査協力者は、コミュニティ・スクール運営の大きな課題の一つとして、少なくとも地域コーディネーターの視点からは、子どもたちが中心になっていないということに気づいていた。そこには、コミュニティ・スクールの中心的な立場の一人である地域コーディネーターが、コミュニティ・スクールの観点からは子どもたちと直接関わる機会がほとんどなく、その効果を実感しづらいという構造的な問題が存在する。この問題を解決するためには、間接的には、子どもたちの成長を第一に意識しながら地域コーディネーターが教員とボランティアをつなげたり、調整したりすることが重要であろう。しかし、それだけでなく、学校や教育の場、子どもたちが地域や保護者ボランティアと関わりをもつ場面に、直接的に地域コーディネーターが意図的に関わりをもつようにすることで、地域の子どもたちを学校と一体となって育てていくという本来の目的（長友・静屋・池田・前原，2017）を達成すると言えるのではないだろうか。

(2) コーディネーター同士の交流がもたらす影響

ここまで、調査協力者がイメージしたコミュニティ・スクール運営の課題について、述べてきた。一方、調査協力者は、コミュニティ・スクールを円滑に運営するために大事に感じていることとして、コーディネーター同士の交流がもたらす影響を述べていた。構造全体の単独イメージにおいて、+が3項目あり、そのうちの2項目が、「地域ボランティア募集の方法の工夫」、「連絡方法の簡略化」と、実践方法の工夫、うまく実践できたことに関する項目であったが、残りの1つである「コーディネーター同士の交流の場」のみが外的要因として挙げられていた。また、その効果として、情報共有をすることで、ストレスが軽減したり、情理的サポートを得たりすることができること、さらには改善点や目標、やりたいことが見えてくるといった意欲の向上についても言及されていた。一つのコミュニティ・スクールに地域コーディネーターは基本的に一人しか配置されず、また調査協力者が述べているように学校と保護者、地域との板挟みになるような立場にあるため、そこに大きな負担がかかることは、疑問の余地がない。しかし、地域コーディネーター同士の交流の場を積極的につくり、横のつながりやソーシャルサポートを活用した支え合う関係を構築することで、地域コーディネーターがエンパワーメントされ、間接的に円滑なコミュニティ・スクールの運営に貢献する可能性が示唆された。

(3) おわりに

本研究では、地域コーディネーターの経験者にコミュニティ・スクール運営の課題についてのPAC分析を行い、そのイメージ構造を探った。その結果、コミュニティ・スクール運営の課題

として、地域コーディネーターを中心とした活動初期の関係づくりの困難さ、関係者の意識共有の困難さ、意識化しづらい子どもを中心としたコミュニティ・スクール運営が明らかになった。また、その背景には、地域コーディネーターの役割の不明瞭さ、教員の多忙化、十分でない活動資金を原因とする地域コーディネーターの活動時間の短さ、地域コーディネーターがコミュニティ・スクールの中心的な立場であるにも関わらず子どもの活動の姿が見えにくいという構造的な問題があることも示された。一方、地域コーディネーター同士の交流の場におけるピア・サポートが、負担の大きい地域コーディネーターの心理的安定に大きな役割を果たしていることが示された。文部科学省（2022）によると、コミュニティ・スクールの導入については、自治体間・学校間で差が見られ、全国の公立学校の66.6%は今後、導入されていく予定である。そのような学校において、本研究の知見を活用することは、コミュニティ・スクールの円滑な導入及び運営に有効なアプローチとなることが考えられる。その点において、本研究には大きな意義があるといえよう。

最後に本研究の課題と展望について述べる。本研究では、地域コーディネーターの経験者を対象にPAC分析を用いてそのイメージ構造を分析したが、調査対象者は1名であり、1事例に留まった。今後、調査対象者を増やして比較検討したり、量的分析を行ったりすることで、コミュニティ・スクール運営の課題をより詳細に明らかにすることができるだろう。また、本研究では、コミュニティ・スクールと地域学校活動本部、そして地域コーディネーターの位置付けについては、検討していない。コミュニティ・スクール運営の課題を多角的な視点で検討するためには、それらの位置付けについても、整理していく必要があるだろう。今後、本研究で明らかになった地域コーディネーターの役割や勤務条件の整備と充実、関係者間や地域コーディネーター同士の交流の機会の拡充をすることで、コミュニティ・スクールにおいて学校・家庭・地域の連携・協働が促進され、子どもが安心して暮らし、成長できる環境をつくることができると言えるのではないだろうか。

引用文献

- 文部科学省（2022）. 学校と地域でつくる学びの未来 ―コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）
<https://manabi-mirai.mext.go.jp/torikumi/chiiki-gakko/cs.html>（検索2022年12月24日）
- 文部科学省（2022）. コミュニティ・スクールの在り方等に関する検討会議 最終まとめ ～学校と地域が協働する新しい時代の学びの日常に向けた対話と信頼に基づく学校運営の実現～
- 内藤哲雄（2002）. PAC分析実施法入門：「個」を科学する新技法への招待（改訂版） ナカニシヤ出版
- 内藤哲雄・金娵鏡（2005）. 発達障害のある幼児をもつ韓国人母親の障害受容に関するPAC分析 ―社会的支援体制と育児ネットワーク機能の視点から人文科学論集〈人間情報科学編〉（信州大学人文学部）39,11-25
- 長畑実（2015）. コミュニティ・スクールの推進に関する研究（2）：コミュニティ・スクールの課題と展望

山口大学大学教育機構 12, 78-94

長友義彦・静屋智・池田廣司・前原隆志 (2017). コミュニティ・スクールの現状と課題：スクール・ガバナンスの視点から 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 44, 93-102

下條満代 (2020). 教育課題解決のためのコミュニティ・スクールの現状と課題 ―地域コミュニティにおける教育資源の活用可能性― *Journal of Inclusive Education*, 8, 67-81

坪松美紗 (2022). 持続可能な地域づくりにおける「よそ者」の役割 立教ESDジャーナル.6,16-17

八尾阪修 (2012). コミュニティ・スクールの展開と課題克服への展望：学校支援地域本部からの示唆 九州大学教育経営学研究紀要 15, 1-6

要約

本研究では、地域コーディネーターの経験者にコミュニティ・スクール運営の課題についてのPAC分析を行い、その態度構造を探った。その結果、コミュニティ・スクール運営の課題として、地域コーディネーターを中心とした活動初期の関係づくりの困難さ、関係者の意識共有の困難さ、意識化しづらい子どもを中心としたコミュニティ・スクール運営があることが明らかになった。一方、地域コーディネーター同士の交流の場におけるピア・サポートが、負担の大きい地域コーディネーターの心理的安定に大きな役割を果たしていることが示された。

